OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	奥の細道ところどころ（六）
Author(s)	小島, 吉雄
Citation	語文. 1953, 9, p. 32-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68431
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

奥の細道ところどころ (六)

小島吉雄

一〇 奥の細道の語法

奥の細道の文章は難解である。一読したところでは、大意を把握することが出来るのであるが、さて、精細に解釈してゆくとなると分らないところが出てくる。しかもその分らないところが多すぎるのである。これは芭蕉に破格の語法が多すぎるところから来てゐる。まづ、一番多く目に立つのは、助詞の省略である。「はるばるのおもひ胸をいたましめて」「三尺ばかりなる桜のつぼみ半ば開けるあり」のやうに、主格を示す「が」や「の」が省略せられる場合もあれば、「児孫愛すがごとし」「風景に魂奪はれ」の如く、連用格の「を」を省略する場合もある。主格の「が」「の」を省略することは、芭蕉ならずとも他にもその例が乏しからず、特に芭蕉に多い破格とは言へないのであるが、連用格の「を」を省略するといふことは、特殊例であつて、しかもそれが芭蕉に於て非常に多いのである。「奥の細道」でも、また頻繁に行はれてゐる。

次に、また、「長途の苦しみ身心つかれ」「夜の名残り心すすまず」といふやうに「長途の苦しみに」「夜の名残りに」と普通ならば言ふべきところを、「に」の助詞を省略してゐると見得るところもある。かういふのになると、語法的に見て、問題を提供する場合も生じてくるのであつて、たとへば、草加の宿に辿りついたところの文に「痩骨の肩にかゝれる物まづ苦しむ」とあるが、これなども、「肩にかかれる物に」とあるべきを前例の如く「に」を省略したのであると見て、「苦しむ」の主語は「われ」であるといふことも出来るのである。

それから、また「奥の細道」に多い破格は、自発の助動詞「る」「らる」を用ゐて「思ひ出でらる」とか「伝はる」とかいふべきところを、きまつて「思ひ出づ」「伝ふ」といふ風にいふ点である。たとへば室の八島の条の「縁起の旨世に伝ふ事も侍りし」の「伝ふ」、「荒海や佐渡に横たふ天の川」の「横たふ」、また月山登山の条の「行尊大僧正の歌のあはれもここに思ひ出でて」の「思ひ出でて」などがそれである松島の記事に「三重にたたみて」といひ、「枝葉汐風に吹きたわめて」といひ、「昼のながめ又改むむ」といふのなども、普通の語法から言へば、「三重にたたまれて」「汐風に吹きたわめられて」「昼のながめ又改まる」といふべきところである。かういふやうなのは、全く芭蕉独得の語法ともいふべきであらう。

そのほか、語調の上から対句的に文を運ぶ関係上、無理な語法をとる場合もある。「麓に大手の跡など人の教ゆるに任せて泪をおとし、又かたはらの古寺に一家の石碑を残す」といふのなどは、「泪をおとし」と「石碑を残す」との語呂を合はせるために、かやうな特殊な措辞となつたのである大石田の条の有名な難文「忘れぬ花の昔をしたひ」と「芦角一声の心をやはらげ」とも語呂を合はせるための措辞である。しかも、これらの措辞には、すくなからず無理

があるから、それで、いざ解釈となると、困る点が出てくるのである。

句調の関係上、語句を転置することが、またしばしばある。転置しても意味にあいまいさを来さぬ時はよろしいが、次のやうな場合は、その転置したために意味がとりにくくなる。たとへば、裏見の滝を見る条に、「廿余町山を登つて滝あり」としるされてゐるが、これについては「日光から二十余町来てから山路を登つてゆくと滝がある」と解釈する説と、「山路を二十余町登つて……」だとする説とがある。結局事実上から言つて「山を二十余町登つて」と解釈する方が正しいのであるが、これは「山を廿余町登つて」といへば間違ひが起らないのを、芭蕉一流の文の調子を出すために「二十余町」を文の頭に置いたのである。そして、そのために、文意が些かあいまいになつて、上述のやうな二説を生じさせることになつたのである。

かういふ風に、芭蕉一流の文の調子を出すために、助詞を省略したり、語句を転置したり、語呂を合はせたりするために、語法上の無理が行はれ、時には破格も出てくるわけであるが、「三山順礼の句々短冊に書く」の如く助詞を省略したりしても何ら意味が不明瞭にならぬ場合もあるけれども、総体的に言つて文の正確な表現を期しがたく、従つて文意の理解には困難の伴ふことがすくなくないのである。しかし、奥の細道の場合では、かういふ破格の語法が却て気分をあらはすに適してゐて、作者の情緒の微妙な陰影を巧みに表現するといふ効果をあげてをり、その点から言へば、奥の細道は名文であるわけである。

さて、われわれは、さういふ破格がもたらす気分とか味はひとかを克明に追及して芭蕉の表現意図を臆測するのであるが、それがまたなかなか容易でない。或は当を得てゐることもあらうし、さうでない場合もあるだらう。

なほ、芭蕉は、また一風変つた助詞の使ひ方をする。たとへば、酒田をたつて越後の方へ歩いてゆかうとするところに、「北陸道の雲に望む」といふ文章がある。「雲に望む」の「に」は普通の言ひ方でない。「望む」といふ動詞は「を」といふ助詞をとるべきである。だが、「雲を望む」といふと、平板に聞える。「雲に望む」といふと、何か特別な感情を含んでゐるかの如く感ぜられる。そこで、奥の細道の注釈書を繙いてみると、「に」には特別の気持がこめられてゐて、「雲に向かつて前途を望む」意だとしるされてゐる。いかにもさうであらう。但し、「望む」に似た動詞に「臨む」がある。この「臨む」の方は、「に」といふ助詞を伴ふのである。たとへば、「川に臨む」などといふ類ひである。「雲に望む」は、恐らくは、「に臨む」の語形に引かれて言つたことであらうが、「臨む」の代りに「望む」となると、そこに何か特別な意味が予想せられてくるのである。芭蕉としては意識せられた破格だから、その破格に何か特別な気持をこめようとしたのであらうと考へられてくるのである。

また、大石田の条に、「ここに古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、芦角一声の心をやはらげ、此の道にさぐり足して、新古ふた道にふみ迷ふといへども」といふ文章があるが、「芦角一声の心をやはらげ」の「の」の助詞なども、その意味や働きが明瞭でない。すなはち、主格を示す助詞か連体格を示す助詞かが明瞭でない。「の」を主格の助詞とすると、芦角一声が心を和らげることになり、「の」を連体格だとすると、芦角一声の心を俳諧が和らげる意となる。樋口功氏の「奥の細道評釈」には後のやうに解釈してをる。前者のやうに「の」を主格の助詞と見るならば、「芦角一声」は「大石田のやうな辺鄙な土地での俳諧」をたとへて言つたので、つまり

「田舎俳諧が心を和らげ」るといふのである。ところが、この場合は、誰の心を和らげるのかが問題となる。岩田九郎氏の「奥の細道詳講」では、芭蕉の心と解するのと大石田の人々の心と解するのとの両説が成立するといふことを述べてゐる。もし、その場合、どちらの心であらうかと考へてみるに、この前後の文では、「昔をしたひ」「さぐり足して」「ふみ迷ふ」等の主語はすべて大石田の俳人であるから、「心をやはらげ」られるのも大石田の俳人たちであると見得るのである。従つて、「心」も「大石田の俳人たちの心」と見る方が妥当なやうである。但し「芦角一声の」の「の」を連体格と見るならば、かういふ紛らはしい問題は起らない。いづれにしても、このところの文章は、前にも述べたごとく、「忘れぬ花の昔をしたひ」と言ひ、「芦角一声の心をやはらげ」と受けて、語呂を合はせてゐるので、その点だけから言へば、「花の昔」の「の」が連体格の一種だから、「芦角一声の心」の「の」もまた連体格の一種と考へる方が理にかなつてゐるやうである。そして、わたくしは、この「芦角一声の」の「の」は、「ノ如キ」の意をもつた「の」であらうと考へる。すなはち、芦角一声は、辺隊の風流心をたとへたのであつて、「芦角一声の如き心」といふ風に解釈を下すべきであらうと思ふ。どうも難解の文章で、厳密に言へば、色々に考へられるのであるが、結局のところ、文の構造より見て、わたくしは、この最後に述べた説が現在のところでは一番穏当なのではないかと考へてゐる。

ところで、この大石田の文章の「新古ふた道にふみ迷ふといへども」の続きに「みちしるべする人しなければ」とあるのであるが、この「と」は、その上の文章のどこからどこまでを受けるのであるか、すなはち、「と」は「と人々の言へれば」といふ意味の「と」であるが、どこからどこまでを大石田の人々の言葉と見るべきかといふことになると、これまた甚だあいまいである。文の構造から言へば、「ここに古き俳諧の種こぼれて」以下「道しるべする人しなければ」までの全部を「と」が受けてゐると見得るのであるが、しかし、文の意味内容から言へば、「古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ」といふやうなのは、芭蕉自身の地の文と見る方がよろしいやうで、これをも会話の文と見るのはふさはしくない。言葉の部分は、「此の道にさぐり足して」以下だけであると見る方が、内容から言つてふさはしい。これも、どこからどこまでが言葉の部分であると文法的に指摘し得ない一例である。

（大阪大学教授）

次号予告

近世大阪和学の研究　特輯

本輯に、大阪和学者著述目録を掲載する旨予告しましたが、次輯を大阪和学の特輯号としますので、右著述目録はその方に併載することに致しました。

受贈図書、雑誌名を掲載する予定でしたが、誌面の都合で次輯にまわすことにいたしました。